

公開シンポジウム報告書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坪口, 純朗, 平井, 博政, 竹内, 隆一, 森, 透, 大下, 邦幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/2726

第1部 <公開シンポジウム>

「子どもたちの可能性を 引き出す教育とは」

日時：10月22日(土)13時－15時

場所：福井大学教育地域科学部1号館大2講義室

シンポジスト：福井ソアーベ児童合唱団主宰・指揮者 坪口純朗氏

元小学校長・福井県内水面総合センター

<魚の相談員> 平井博政氏

フリースクール WILL BE 高等学院 竹内隆一氏

教育実践総合センター教授

森 透

司会：教育実践総合センター長 大下邦幸

<司会（大下邦幸教育実践総合センター長）>

それでは時間となりましたので、教育地域科学部長の黒木哲徳先生からご挨拶をお願い致します。

<黒木哲徳学部長>

皆さんこんにちは。今日は教育実践総合センター主催の公開シンポジウムです。昨年に引き続きまして2回目ですが、学部にとっても大きなイベントをやっています。今日は、「子どもたちの可能性を引き出す教育とは」ということで4人のシンポジストの先生方、それから客員の先生方にも第2部の教育懇談会でお呼びいたしております。

教育にとって大切なことは、一生懸命やるということはもちろんですが、難しいのは今日のテーマにもあります、子どもたちの可能性を引き出す教育、子どもたちの個性を伸ばす教育だと思います。個性を伸ばすと一口にいいましてもいろいろあると思いますが、いったいどのようにしたら個性を伸ばすことができるのか、また何が大切なことなのかということをシンポジストの先生方から、それぞれの分野の深い経験にもとづいて教えていただいて、皆さん方の参考にしていただけたらと思います。

可能性を引き出すということでは、自分の子どものことで恐縮なんですけど、ある日詩を書いてきて、その細やかな描写に驚かされたことです。小学校の1、2年の担任が国語の先生だったのですが、その詩が大人の私が感動するくらいよくかけていたのです。本当にびっくりしました。どうしたら子どもの感性をこれほど上手に引き出せるのか、教師のもつ専門的な力量にあらためて親として驚かされた経験がございます。いま、子どもの可能性を引き出す教育が問われており、今後追求していかなければならない大切な課題だと思います。

今日は、3時までということでございますけれども、非常に大切なシンポジウムであり、期待しております。又3時15分からは、それぞれの分科会ということになっておりますので、どうぞよろしくお願いします。

<司会（大下）>

どうもありがとうございました。それではですね、きょうのシンポジウムですが「子どもたちの可能性を引き出す教育とは」ということで四人の方にお話をお願いしておりますので、皆さんの向かって左側からです。福井ソアーベ児童合唱団主宰の坪口純朗先生です。皆さん、福井ソアーベ児童合唱団というのはとても有名でご存知だと思いますが、第16回のウイーンの世界青少年音楽祭および特別大賞を受賞していますね。福井という枠だけでなく世界という枠でもご活躍されている先生で、合唱団を指導していただいている先生です。それから次の方は平井博政先生です。先には



附属小学校でも長らく教鞭をとっておられました。そして松本小学校の校長先生を最後にご退職されました。理科の先生ですね。色々なことに興味をお持ちですが、魚の研究者としてご活躍です。それから、3番目の方ですけどもフリースクール・ウィルビ高等学院代表竹内隆一先生です。竹内先生は他の大学のご出身ですけども、福井大学にまったくご縁がないと言うわけでもございません。英語の教員免許を取るためにですね、福井大学に単位履修のために10年ほど前にですね、きて勉強をなさいました。現在はですね、不登校と言いますか、ちょっと学校に行けない子どもたちにフィールドワークと言いますか野外活動と言いますか、子どもたちにしっかりとした気持ちを回復していこうと、そういうふうな教育を実践されておられます。最後は、私ども教育実践総合センターの先生で森先生です。もう皆さんご存知のようですから。それではですね早速始めます。お一人のかたに20分ずつお話を頂きます。その後ですね、皆さんのほうから質問やコメントでも結構ですので出していただきます。それからですね、その意見を柱にして3時まで会を進行してしていきたいと思います。教育というのは英語ではEDUCATIONと言いますが、そのEDUCATEというのは語源は「引き出す」ということなんですね。そういう意味で今日はまさに教育の本質というものはいったい何なのか、教育の真髄というものを皆さんにですね共有していただけたらと思います。それでは早速始めます。坪口先生の方から順番にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

<坪口純朗先生>

廊下を歩いていましたら、みんなの明るい声が聞こえてきました。みんなの声っていいねえ。自然な声が届くのは美しい。実は福井ソアーベ児童合唱団のソアーベというのは“心地よくやわらかな”という意味があります。そんな声ですね。僕は県内県外あちこちおしゃべりして歩いています。



そうしますと、お国はどちらですか？とよく聞かれます。「フクイです」「フク・・・？」。フクイの「イ」が小さく聞こえてしまうようです。聞きなおしたいけれども聞き直したら失礼と思われるのでしょいかね。だからわたしは「フクイケン」といいます。県をつけるとですね、フクイの「イ」に力が入って、「フ・ク・イ」がよく聞こえて福井県。合唱団でも「福井」ではどこにいても覚えてもらえない。ということでソアーベをつけました。口が「アー」と開くんですね。イタリア語なんです。楽語辞典で音楽用語ひき出しましてね、フクイとすぼまる口元が「アー」と開く名前にしようと「福井ソアーベ児童合唱団」としました。

合唱団を主宰していますと、音楽のことばかり考えているんだろうと思われるけど、僕は毎日子どものことを考えています。今おしゃべりしている最中でも頭の半分は子どもがうごめいているんですね。集団の中の問題児のことなんかがね。よく言われます。ソアーベは楽しそうだな、演奏

しますと、ものすごい訓練をしたんだろうと。練習はね月に3回です。多くても4回。月に3回、4回などはね、そうですね学校の授業と同じくらいかな。それも会場が3つに分かれているから、全員で102名ですがね。全員が集まるのは年に合宿と定期演奏会の一週間前と本番の年に3回だけです。それだけですな。

だいたい、みんな何のために生きているんだと思う？ 僕は何のために生きているんだ。僕はこう思っています。「自己表現のために」生きているんだと。表し方は色々ありますよ。出過ぎるとひんしゅくを買いますけど、嫌だなあ、いやらしいなあ。人間は感ずる動物ですから。口で言ったりはしません。色々感じた中の一部を選んで楽しく表現してほしい。傷つかないような表現を。福井ソアーベ児童合唱団について言おうと思うと1時間半か2時間の時間をいただきたい。でも今日はシンポジウムですから、福井ソアーベで直面している問題、それをお話しようと思います。

ソアーベの構成は、幼児から高校3年生までが一応基本なんです。高校生終わっても辞めたくないという子もいて、今福井大学の学生も団員として続けてますよ。絶対やめたくない、20歳までは絶対やめないと。2歳児からですよ。ついこないだ2、3ヶ月前だったかな、2歳どころか生まれて2、3ヶ月の子が入ってきたんですよ。お母さんに連れられて来て、いくつなの？と聞くと、2ヶ月です。その子一生懸命聞いてますよ。静かな曲を聴くと機嫌悪くなって泣き出す。特に演奏をとめてみんなで相談しているときや、歌をやめて私が話を始めるとですね、眉間にしわを寄せてね、どうやら私の話が気にいらんらしい。家内はピアノ伴奏者なんですけどね、2人とも福井大学の卒業であります。私はグリーンエコー合唱団の指揮者で4年間ずっとやっていました。今でも忘れられないのはね、フォーレの「レクイエム」全曲を演奏しましてね。北陸三県での演奏会にたまたまですが、マイクで音楽家の方に呼び出されてですね、「こんな地方の大学でこんな大曲をしあげるとは」と言われたんです。励まされてとってもうれしかったけど、よく考えたら、「あれ？何だ」と。地方の大学でこんな歌が歌えるのか？ 歌えますよ。それを聞いてね、あ～福井はそういうことになってるなあと思いましたよ。

10年間福井県で音楽教師をしてきましたけれども、武者修行で大阪へ行ってきました。東京には縁が無くてね。大阪へいったんです。対面した音楽教師から、「あんた福井県からのこのこやってきてなにかできるの？」って言われたんです。あれ？どこへいっても福井はあかんなあ。福井からのこのこやってきてなんてね。こんなこともいわれましたよ。「福井の子はおしゃべりできないんですってねえ」と。冗談でしょう、おしゃべりしないと生きていけないですよ。それで大阪で合唱団を作った。100人の児童合唱団を作りました。まあその話を続けると時間足りなくなりますけれどねえ。そこで、10年間テレビ出演したりいろいろな活動がありましたけれども、もっとでかいことがやりたい。よし福井に帰って「世界に羽ばたく合唱団」を作ろうと。で、募集をかけた。福井県中にチラシを配ったんですけども、2人からしか電話がかかってこなかった。コーヒー飲みながら電話がかかって来るの待ってたんです。それでパッと気付いたのね。コーヒーなんか飲んでいる身分ではないんだと。俺は生意気なんだ。よしと思い立って、福井市内400軒、一軒

一軒頭を下げて「実はこういう合唱団作るんです。どうか協力してほしい。」と訴えました。なかなかウンといいませんよ。合唱団入って、なんかいいことあるんけえ？いいとこ就職させてもらえるんなら入る。お金くれるんなら入るでえ。やくざの人にも頼みました。おしゃべりしてると、どすのきいた声でどなられてね。失礼しました、バイ、バイって帰ってきましたけれど、400軒まわって40人集まってね、早速ご父兄にも集まっていたいてね、こういうつもりで僕はやりたい。当然蚊の鳴くような声でしか歌えません。それでも僕は「いいなみんな！ 非常にいい歌声になって来たぞ。テレビにも出るぞ、そういう合唱団にするぞ。福井県だけでないぞ、県外でも演奏できるようにするぞ。海外にも行くぞ」と。練習が終わってある父兄が「先生今日のお話とてもお元気そうですね、海外はちょっと無理でないんでしょうか」「ああそう思いますか？」しかし、結成して5年目にウィーンにいったんです。そのお母さんは謝りにきましたよ。「あんな失礼なことって申し訳ない」と。「いやいやとんでもない」。僕はね、でかいことが好きなんです。福井県で小学校の担任を授かったことがあります。音楽専攻でしたけれどもね。その頃はね、1,000人くらいいましたけれども、4年生以上全部音楽好きにしようと思ったんです。ところが校長先生から、「6年生1クラスどうかもってもらえないか」と。お断りしたんですが、又呼び出されてね、「どうだ、君担任やってみないか、いい勉強になるぞ」とね。イヤー、私は担任よりも、学校全部の子どもを音楽好きにしないとイケないんですが、話をうかがってるうちにあんなほど、そうか校長先生がそういう考えでいらっしゃるなら、「校長先生、担任をおおせつかった以上私の好きなようにやってよろしいでしょうか。」「担任受けてくれるんなら好きにしまえ」「わかりました」。

最初がかんじん。僕がこのクラスを受け持った以上みんなと一緒に行動する。ある決意をもっていたからです。「このクラスを5つのクラスのナンバーワンにするぞ」と。いや福井県一だと。子どもらが、「そりゃあ無理です」と言うのが小さい声で聞こえた。「福井県一が無理か、よし、じゃあ日本一にしよう」と言うのと「あかんわ、話にならんわ」とつぶやく子もいましたよ。そこで、「僕に協力してくれるならば、君たちの願いを一つ聞こう。迷わずに“今これをこうしてほしい”という問題を一つね、ある子は勇気を出して発表してください」すると、「はい、先生」「なんだ？」「宿題をなしにしてほしい」私はすぐに答えた。「よし、分かった。今日から宿題なしだ」。問題でしょう？ 宿題ないなんて。どうですか皆さん、クラス持って、「宿題ないよ」なんて言えますか？ほんとに宿題は全部なしにしました。それはまだ福井大学を卒業して3年目のことです。大変なことになると、先輩教師から言われましたよ。「お前クビになるぞ」って。しかし、僕は辞表をちゃんと持っていましたからね。何も問題は起きなかったですよ。で、その子どもたちがね、ものすごく勉強した。となり近所の家に行ってもクラスが違いますねえ、「いや、宿題があるから遊んでる時間がない」と、ことわられる。その子は遊んでいられないと思うようになった。さあ、その気になったら、工夫する。グループを作ってねえ、それぞれの家へねえ、ぐるぐる回って予習をしたりと、もうれつに勉強して、目的の学校にみんな進んだ。あんなに馬力のあるクラスはなかった。宿題は絶対に出さなかった。約束だからね。極端ですけども、一見問題になるようなことなんですが、本

気になったらなんとかあるということだけは分かりましたよ。ということで、人と一緒にことをしているのでは、世界には羽ばたけない。私は全国各地のこれだっという団体の練習の見学をさせてもらいました。発声練習、30分ほどやってます。うちの合唱団は3分しかやってません。3分ですよ3分。海外からも見学に来ました。「ああ、3分以内で終わってるわ」楽譜を読みながら歌う訓練？「ああ、そんなの必要ない」「はい、みんないいかなー、楽譜読める人？」と聞くと、手が挙がるのはピアノを勉強してる人でほんの5、6人。「よし、楽譜を模様として見よう。楽譜は模様だぞ。」このごろはねえ、新しい楽譜をパッと渡してもねえ、すぐ歌える。音符の位置を模様として勘で覚えてる。それでいいんです。今は学校で成績をとることとは別にしてね。えー、じゃあそんなに優秀な子がいるのかと言いますと、「音楽は嫌いだけど友達が欲しいから入れてください」と言ってお母さんが子どもを連れてくる。「一人っ子で、どうにもならない。社会性がないから入れてください。歌はどうでもいいんです。」ハッキリいいますよ、お母さんは。そんな子が、外国へ行っては英語で独唱をしたり、ブラジル行ったらポルトガル語でちゃんと歌ったりするんですよ。どんどんどんどん伸びていきます。その基本というのは、「この部屋に一步でも足を踏み入れた子は偉大な人物だ」と言い聞かせ、僕は必ず一人一人握手をしてこんにちをは言う。返事しない子いますよ。高等学校3年になっても、ある男の子は、挨拶ができませんでした。黙って手を出すだけ。毎年プログラムにね、顔写真をつけてね、“卒団生の言葉”というのを書いてもらっている。その時にね、「僕は、高校3年まで合唱を続けて、挨拶が大事だということを学びました」って。最後に「ありがとうございました」ってわざわざ言いに来ましたね。幼児から高校生まで、大学生もいますから層が厚いです。

ほんとに、人間が生まれて、幼児からずーっと大きくなって思春期を迎え、変わって行く。人のことが気になるようになる。自分はどうかしたらいいか。目立ちたい。目立ちたいけど、いい方法がない。自分は人の目にどう見えるのだろう？ いつも楽しそうな顔をして、やかましくてもういい加減にせえやと耳打ちしなくちゃならない子が、またほんとに元気がよくてねえ、「ああかわいいな、人間ていいなあ」と思っていた子が、思春期を迎えた頃から、しゅんっとなってしまう。なんでだろ？ 子どもだって今色々大変な問題に直面している。不登校児もいます、言語障害者もいます。みんなに、「10年間、絶対に上手く喋れないからと言って馬鹿にしたらいかんぞ」と約束させる。合唱で私が厳しいのは、しつけです。どんなしつけか。「人を馬鹿にすることは絶対にダメだ」ということ。障害児は「うううう」と、名前も言えません。合唱して録音を録ると、「うーうー」という声が響いてるんです。それでも僕は我慢しました。その子は5年ほどしてから、やっと自分の名前が言えるようになりましたね。だいたい、遅刻、早退、欠席、自由な団体です。どんどん休みます。来週大事な演奏会があるっていうのに、電話かかってきます。「あのねえ、家中でスキーに行くから、最後の練習出られないんです。さよなら」って。「おお、元気でな。怪我したらだめだぞ」・・・「何だと思ってるんだ」とは言いません。明日国民文化祭の演奏会がある。リハーサルをしなくて出る。そういう合唱団なんです。「リハーサルどうします？いたしますか？」「いえ、

いえ、いえ」。県内の広範囲に散らばっている子たちはそうそう集められません。

それから、「叱らない指導」。難しいですよ、叱らない。しかし、そのためにどんどんどんどん表現するようになりました。それから、「全員踊って歌おう」「まっかっか、空の雲♪ みんなの顔もまっかっか♪」とこう、みんな喜んで踊りながら、大きい子も小さい子も一緒に踊って、パフォーマンス入りのコーラス団なんです。ですから外国へ行くとそりゃあ喜ばれますよ。「おお、日本人は踊るんだ」とね。まあそんなことで、基本は、“心の扉を開かせる”こと。人間は、嫌味を言われたら、顔は笑っていても心が痛みます。「ハイ、みんなこっち向いて」と言っても、パッと横を向く子もいます。学校の先生は、どちらかと言うと反応が早い。「こらっ、なに横見てるんだ」・・・横見たっていいじゃないですか。「こらっ、横見てるんじゃない！」その瞬間他のみんながいやあな気持ちになる。「おおー、何かいいものが見えるのかな？ どれどれ、ちょっと見せてもらおうか」中学生になったら両手にアゴをのせて、こうやって外見てますよ。「何が見えたの？」「蛙が跳んだ」「そうか、蛙が跳んだんか。そうか」「蛙いないやないか」「アッチ行った」。「オー、ほとんど全員がこっち見てくれていいクラスだ」というふうに、直接叱り飛ばさない。「しからない指導」を、ひとつ心がけてみてください。できたらすごい。

<司会（大下）>

ありがとうございました。それでは、平井先生、よろしくお願いいたしますと思います。

<平井博政先生>

えー、これはダイソーで買ってきた風船です。100円で35個。1個3円くらいですね。だからただの風船じゃありませんよ、3円しましたからね（笑）。（風船を膨らます）はい、この風船に串を刺したい方はいますか？ 割れると思う人？ 割れないと思う人？ おっ、いるねえ。じゃあやってみようかな（笑）。やってくれる？ ありがとう。



う。みんなで（やってくれる人に）拍手して。今、割れないと言いましたね。割れても泣かないでね、約束（笑）（串を刺し、割れる）あぁー、割れましたね。すいませんありがとうございました。拍手してあげてください。

ええー、風船はねえ、こういうものを刺すと割れる、まあそれが普通ですね。（また膨らまし、一度失敗したふりをして指から離し風船を飛ばす）あっ失敗しました。困りましたねえ（自分で拾いにいく）、誰か拾ってくれるかと思ったんですけどねえ。小学生なら拾ってくれるんです（笑）。

（もう一度膨らます）さあ、いきますよお。じゃあ、おまじないをかけます。割れるな割れるな割れるな・・・さあ、さっきはダメでしたね、いきます・・・（串を刺すが割れない）抜きます、刺

します・・・おかしいね。これ、刺すときねえ、怖かったら他の人の所でやって（学生のところに風船を近づける）・・・はいけないね（笑）さあ、いきますよ・・・ほら、（風船の反対側に串が）飛び出してきた。はい、拍手してください。

じゃあ、実はこれ割れない風船・・・ですか？ 割れない風船だと思う人手挙げて。じゃあ割れる風船だと思う人手挙げてみってくれる？ ああそう、やっぱそう思うのか。やっぱ割れる風船だねえ。じゃあ、もう（串を）一本刺してみようかね。いきますよ。（刺す）ほら、おかしいねえ。割れない風船だと思う人手挙げて？（一人の学生の所に行き）やってみる？ どうぞ、遠慮せずに。好きな所から刺してみて。はい、やって、こっち（みんなの方に）向きながら思い切って。おっ、割れない！すごい！スーパーウーマンだよお。すごいねえ。はい、これは、割れない風船？・・・（風船を割る）ではないんですね。割れる風船なんですねえ。はい、すごい、今ねえ、ちゃんと割れないおまじないかけられるようになった。なぜ割れなかったかと言うと、それは、マジックではないんだよね。答えは言わないけれどヒントだけ言います。

いいですか、風船をよく見て。（ふくらんだ風船を回しながら見せる）色が少し、もう少しおっきくするとよく分かるかな、おんなじ色じゃないの分かる？ 濃いところと薄いところとあるねえ。風船はねえ、同じように膨らむのではなくて、あるところはぐっと膨らんであるところはあんまり膨らまない。で、ぐっと膨らんだところは色が薄くなるし、膨らんでないところはちょっと色が濃くなってる。で、膨らんでるところは割れ・・・にくい？ やすい？ やすい、そうだね。膨らんでいないところはおそらく割れにくいんだね。はい、あとはやってみて下さい。100円で35回できるからね（笑）。

はい、えー、月曜日の朝礼ですね、全校朝礼で私がこれをやりますと、800人の子どもね、もちろん心に寂しさを抱えた子もいるんだけど、みんな一生懸命聞きます。今皆さんも聞いてくださいましたね。実は、800人の子どもに、普通校長先生というのは朝礼のときにお話なさるんだけど・・・。みなさんに聞きますよ。月曜朝礼に、校長先生のお話が、たとえば出張なんかでなかったら、嬉しかった人、手挙げて。遠慮なくどうぞ。（たくさん手が挙がる）そうでしょう、私もそうだったんです。「今日はいない、よかったー！」でも代わりに教頭先生がながーいお話で「うわー」なんて思ったこともありましたがねえ。実はねえ、長話の面白くない話なんて誰も聞きたくない。そうでしょう？ だからねえ、話というものは、聞いていて「あっ、また聞きたい」と思うような話をしなくちゃだめなんですね。で、私は今これは校長という立場で言っているけど、担任だって同じことなんです。朝晩ねえ、くどくどくどくどと同じことばかり、宿題がなんとかかんとかそんなことばかり言っていると、子どもはだんだん腐ってくるんです。やっぱね、そこでね、なんか「あっ、楽しい、すごい」というようなのをちょちゃっと入れていく必要があるわけです。っていうのはね、教師っていうのは、真面目さっていうのはとても大事なことね。私もあの一、真面目なほうだったと思うんだけど、真面目さは大事なんだけど、じゃあ、真面目さだけで今この世の中いいのかって考えてごらん。

時代は変わりましたよ。岡田幹事長って、知ってます？ 民主党。小泉さんはね、「郵政改革だ」って言ってたけどね、「いや、教育とか年金もあるんだ」って後ろを振り返ったのね。私はそれをみてはるかにいいと思った。真面目にやってるから。しかし開けてみてごらんない、あのざまだよ。片一方はね、郵政民営化だけを出してね、(参議院で) 否決されたんですよ？ 本来なら、内閣はもうぶっ潰れて新しいのが出来てよかったのに。そうでしょ？ 自分が命がけでやったのが否決されたんですよ？ にもかかわらず、ああいうふうにはひっくり返ったでしょ。国民に真意をとるとか言って、あんなのおかしいでしょ。そこらへんをちょっと考えてみってくれる？ なぜなのか？ 実はね、今ね世の中っていうのは、真面目に一生懸命やる教師、それはそれでいいんだよ。すごく大事なこと。真面目さ抜いたら教師として勤まらない。だけど、今真面目さだけで行ったら、たとえば子どもの不登校がなおり、保護者が信頼し、地域が支えてくれるかって考えてみてください。そこですよ。今の時代っていうのは移り変わっていて、やっぱりね、学校や教師っていうのはね、一種のエンターテイナーとしてあるいはパフォーマンスもきっちりできて、自分らの思うことを地域に発信して、地域の心をつかんでいくようなことができなかったら、それは生きられない時代なんです。おそらくみんなの中でもね、教育学部入った当時は、だいたい一生懸命勉強して真面目なんだよね。そういう人も行き詰るっていうのは、真面目さだけで勝負するから。大変これはつらいことを言いますよ、だけど今私がこの風船をやったとき皆さんぐっと惹かれたでしょ、そしてなんとなくホッとしましたか。「ここでどんな話をするのかなあ、あのおっちゃん来て」。でも今、私の話を聞きながら、「ああそうかな」という思いがちょっとし始めたでしょ。まあ、そういうようなことを、心にちょっと置いておいてください。

えーと、その「教育アラカルト」(学生に配布したプリント) っていうのに、教育の工夫のヒントを1番から28番まで出しました。実は、「子どもたちの可能性を引き出す教育とは」って、この問題で喋れって教育実践センターから言われてものすごく悩んだ。こんなことを簡単に言えるんだったらねえ、大学の先生は10分の1でいいよ。だって答えが分かっているんだから。分かっているから、こんなに沢山の人がいてみんなで考えてるんだからね。

私は思いついた1から28のことをチャチャッと、2時間くらいで書いてみました。一つひとつが子どもを伸ばす例として、挙げてみました。(この中から) 皆さんが、選んだもの(を話すとする)で、せいぜい一つか二つしか話せないと思いますが……。あとどれくらい時間がありますか。あと10分、うまく喋って、二つ。(この中から) 皆さんに二つ選んでもらいたいと思います。早い者勝ちで二つ。(2分間ほど静寂) はい、お願いします。16番、もう一つ、はい、3番で、不登校ですね。

今、皆さんが読んでいる間、私がほとんど話さなかったのに気づきましたか。手を挙げた人に対して答えただけです。子ども達が作業しているのに、何やかんやと騒ぎ立てる教師がいます。特に、失敗した授業です。子どもが(読んで) 考えて、ありのままに言うのだから、考えている時間は貴重です。

じゃあ、16 番（理科研究ってむずかしいし、やりづらい。科学の探究過程を楽しむ方法は？）ね、えっと、こちらでこんなものしか見せられないんですけどね。（児童の理科研究のレポートを出す）良かったら、見てください。小学校 4 年生の理科研究です。どんな研究かというですね、「ありは何を食べるか」というものです。どうしたかという、家の庭にですね、大きな紙を置いて、ゴキブリ、さつまいも、それから、かき、ポテトチップス、あられ、ベーコン、昆布、するめ、バナナ、片栗粉を置いてですね、ありが来たら、ぴしゃっと（セロテープで）とめて、セロテープでくっついたありをばたばたと大きな紙に貼って、「研究です」って持ってきたんです。いいですか、ありのセロテープづけが並んでいるんです。さあ、どうします。困りましたよ。でも、子どもは一生懸命やったんです。

だから、私は、こんな風にマトリックスにしたの。縦と横があって、横はアミメアリ、アメイロアリ、クロヤマアリ、ヒメアリ…と続きます。縦はですね、上が動物性、下が植物性、真ん中が混じったものです。混じったものには、カレイの唐揚げ、ダシじゃこピーナッツ、下がりんと、大根…。それで、何匹来たかがずっと続いています。そうしましたら、アミメアリは上から下までずっといました。ということは、アミメアリは、何が分かります？ アミメアリは・・・、こういう時に出てこない私は、がっかり寂しいですよ。私は喋りに来ているの、対話しに来ているわけ。はい、アミメアリは…そんなに敷居が高いですか、雑食といえますね。何でも食べるというわけです。それに対して、イエヒメアリは、このほとんど上は何でも、ほとんど肉食というわけです。オオゾアカアリは、ほとんど下だけなんです。これは、植物性で、植物を食べることが分かります。

これを作業でやると、子どもは理科をすごく楽しめます。いろんなことをするから、持ってきたものを（ひとつひとつ）データ化して、そのデータを見て何が分かるって 2 人で辿っていくと時たま、「わあ、すごい」というのが見つかるんですね。そうしたら、2 人で感激です。もうちょっと（他の研究も）用意してきたんですが、時間がありませんので、この辺で 2 つ目（の質問）です。

2 つ目は、不登校（不登校児童を作らない学校づくりは可能なのか？ どうすればいいの？）だったかな。ちょっとお聞きしますが、不登校児を作らない学校づくりはどうでしょうか。方策というか、こうやったら出ないという方策が、あるかないか、どうですか。（間）分かりませんか。もし、あったら大変ですよ。こうすれば、不登校がなくなるって分かったとするでしょう。もし、分かったら、それについてのある関係者は要らなくなるからね。大学の先生は、失業するよ。教育関係者、相談を受けている人らも、おそらく何人も失業するよ。だからね、不登校っていうのは 100% 出ないっていうのは、ありえないことなんです。ただし、たまたま努力の結果不登校が出ない学校づくりが出来たっていう例はあるんです。それではね、ある一つの例だとして聞いてください。時間の都合上、出来るだけ短くします。

私が、校長で行った学校で不登校の子どもが 7 人いました。800 人の中で、7 人ね。そして、4 年目にゼロになりました。ただし、ゼロになったというのは、ただゼロになったのではなくて、例

えば保健室に来ていても出席とみなしますから、(不登校)ゼロなんですね。でもね、4年目には、相談室・保健室に誰もいませんでした。教室から、(授業中に)ビーッと飛び出す子どもがいます。そうすると、担任も一緒になって追いかけます。そんな子どももいなくなりました。教室で授業が始まると、全員が先生の話聞くようになりました。それが4年目です。そのために、3年間、何があったかというですね。大事なことは、不登校の子は悩めます。担任も一生懸命になって関わります。だけど、私が言うのはですね「あんたは、その子だけの担任じゃないんだよ。38人いるんだったら、38人の担任なんやで。だから決して、その子のことで頭をいっぱいにせんといってくれ。あんたは38人の子ども達が伸びる学級を考えてくれ。その不登校になった子どもについては、今、校長なり教頭なり、他の先生も含めて、どうすべきか、受け皿をどうすべきかを考えるから」と。それから、実際、その子の問題についていろいろ手をつけてみました。

えっとまあ、3年目の話をしますと、4人の不登校の子どもがいました。その子らの面倒を見るのに、市教委から助けてくれる人(ライフパートナーなど)が週に2回、皆さんもやっていますね、ああいう方がやってきて助けてくれました。それから、先生には…もちろん親とはしょっちゅう話していました。こういう風にして、こうします、ここまできたら、こうしますって話します。その次に先生方に話したことはですね、子どもが苦しんでいるときこそ明るく、ニコニコ顔でいてくださいと。眉間に皺を寄せて、にらんでいるような目つきでいると、子どもはこう引いたようになります。子どもが沈んでしまいます。明るい顔でニコニコやってほしい。学級の中で、子ども達の良さを誉めて誉めて、誉めまくってほしい。そうすると、学級の雰囲気がよくなるから、即ち、不登校の子が入ってきやすい学級づくりにつながる大事なことなんです。だから、とにかく、先生が子どもを可愛がって、優しい良い雰囲気の学級作りをしてくださいと言ってきました。

問題が落ち着いてきた頃に、私は担任に言いましたね。「大変やと思う。先生も辛いと思うけど、子どもはもっと辛いかもしれない。保護者も辛い。だからな、その子がちょっとでも、辛さが取れるように、みんなで何とか考えていこうや。」と言っては話し合いをしていました。だから、ほんの一步でもいいです、ちょっとでもその子が明るくなるように、一つずつ手を打ったのです。それで、4年前、そういう風な形になりました。

大事なことは、いいですか、3年目の年に(不登校児童が)4人残ったのです。その間、新一年生は3回入ってきた間に、一人も不登校が出ませんでした。在校生から一人も出ませんでした。最後の4人が、卒業したときにゼロになりました。最後の4人の卒業生はどうなったかというと、うち3人がそっくりそのまま中学校の普通学級に入ることが出来ました。かなり心配しました。けれど、支えて支えて良い雰囲気の学級が出来ていたようです。一人の子は、特別学級でしたが、その子は中学校では保健室登校でした。まあ、そんな感じです。一例としてはあります。ないことはない、私は信じています。では、時間ですので失礼します。

<司会（大下）>

ありがとうございました。それでは竹内先生、よろしくお願いします。

<竹内隆一先生>

それでは、学校の先生になるために役立つ話かどうか、分かりませんが、私がやってきたことは、いわゆる学校とは違うことをやってきたかと思います。今までやってきた経緯を説明したいと思います。そして、現状で抱えている問題につきまして、お話していきたいと思います。フリースクールWILL BE 高等学院は、今現在、そういう名前になっているのですが、その経緯から話していきたいと思います。



まず、最初に始めたのが、平成元年、冒険塾という名前でした。その当時、子ども達にもっと外に出て欲しいという願いがあり、脱サラしてそのような機会を作ろうと考えて始めたわけです。いろいろやりましたが主にアウトドアをやってきました、北海道でスキーをやったり、海外のアメリカのシアトル近くのレーニア山で、そのところに登って、皆を連れていったり。もうちょい、すごいところでは、変革の時代にあったソビエトに行ったこともありました。モスクワでは街中のデパートに入るんですけども、中は何もなくて、まあそんな時代に中学生・高校生をホームステイさせました。そしてウラル山脈に。そこで北極子どもの祭典というのがあったわけですが、とても印象的でした。そこに参加した、当時高校生だった子が、そのソビエトの企画から帰ってきた時、大学受験をやめて旅に出ると言い始めたんですね。今はもう、その生徒は30代になって庭師として頑張っていますけど、今思えばそういうチャレンジ精神が大切なんじゃないかなって思います。そんなこともあって、私、37歳のときに英語の先生になってみたいと思って福井大学に科目等履修生として入りました。私は、理科系の大学出身なんですけど、やっぱり、海外に行きたかったのもあって。それは、非常に環境も変わるし、すごく心を広くするのにいいんじゃないかなと思って、その決心をしました。

それで、その時に、不登校のお子さんについての勉強を同時にやってきました。それから、野外教育っていう部分を不登校のみんなに役に立つというのか、いいんじゃないということで、本格的にやってみたいと思って、フリースクールという名前に変えたのが平成9年です。不登校のお子さんが、学校以外に行くところがない。普段から行くところ、居場所を作るという意味で場所も変えてスタートしました。冒険塾時代のアウトドアをいかしながら、時間もあるんだから、野外にでも行こうかというつもりで始めたんです。それが平成9年で、ただフリースクールを始めまして、いろいろ問題にぶちあたりました。と言いますのは不登校のお子さんをいきなり山に連れて行けるかというと、そうではなかった。やっぱりそれ以前の問題があったのかなと思いますけれど、学校に

行けないということで、心の落ち込みもありますし、体力もかなりなかった。そういう意味で、なかなか自分が思っているようなチャレンジができませんでした。しかし、アウトドアというものを通して、コミュニケーションをしようということで、比較的体力の使わない畑仕事とかハイキングとか、登山とか釣りとかそういうもののいろいろやりました。

そのような中で、その元気がない状態から元気をつける状態にしまして、野外に連れて行って、楽しんで活発にやれる状態にもっていくということをやってきました。それはなかなか大変で難しかったです。アウトドアとか、インドアとか、スポーツ活動とか、お菓子作りとか何とかっていろいろなことをフリースクールでやってきましたが、やっぱりどうしてもできなかったことが一つあります。それは勉強することでした。本来やっぱり勉強が嫌で学校に行けないといったそういう問題をかかえているわけですので、やっぱり、フリースクールで勉強しようと思っても、もちろんできないのは分かるんだけど、それでいいのかという疑問も抱きながら見てきました。勉強という前に、元気にしたいっていう。まずは元気になってもらいたいということがあるから、それは、2つ目の課題みたいなことで考えていました。やっぱりみんな子どもたちがほんとに元気になることが先ですから。北海道に連れて行ったり、マレーシアとか海外も行きましたけど、行って確かに元気になってるんだけど、やっぱりまだどっかでなんか力ないって部分があるかなって思うところがあるんですね。それは、やっぱり学校に行けなかったことから来るのかなと思うんですけど。それだけ子ども達にとって、学校や勉強というのは、気になること、大事なことなんだろうと思います。予想なんですけどね。

ですので、じゃあ、フリースクールをどのようにして勉強とか、そういう学校形態を作っていくといいだろうかということも考えてまいりました。なんとか勉強させるにはどうしたらいいのか。させるっていうのはちょっとおかしいけど、そういうもの、途中結果に残したい。じゃあやっぱり、なんだろう、うちの場合は高校中退してきた、そんな人が多いこともあって、高校を卒業することは大事なんです。フリースクールでは、大検とかそういったものを通して、あるいは通信制のサポートをしたり、そういうのをしていたんですが、そんなことやっていたこともあって、フリースクールに来て、勉強したら高卒の単位になるんだっていうことを、ぜひとも実現したかった。それです。県の教育委員会をお願いをしてきて、今年の4月から広域通信制高校との技能連携という形にしました。それは、高校の卒業単位を通信制高校のカリキュラムで、フリースクールで履修して卒業単位にすることができるというひとつの学校形態的なものですが、それをやりました。今年の4月から、授業という形をとりながら学ぶフリースクール WILL BE 高等学院というようにしました。

今現在、21、2人の高校学校の生徒がきています。夏から秋にかけて7、8人入学してきたこともありました。みんな高校で欠席が多かったようですが、なぜ退学してしまったのかとみんなに聞くと、一番の原因は、人間関係で友達とうまくいかないということ、特に女の子はそれが多いようでした。なぜかなという気がしますが、いろいろ外交的ですが友達関係でトラブルがあって、学校

に行くのが嫌になったというようなことだと思います。もう一方では、非常にまじめでやってきたけれども、まあ、なんか急にだめになったっていうそういうタイプ。どちらか極端に分かれていますね。そういう子達が一緒になって授業しています。

僕が今思っていることは、そういう小さな自由な学校のような場で、ひきこもり気味の人やヤンキー系の活発系の両極端の子達がいかにしてコミュニケーションをとっていけるかっていう、そういうスタンスができないかなと思っています。もちろん、仲良くなんてことは考えていないけど、同じようにそういう場所で、存在してもいいんだっていうのかな、そういうスタンスがとれないかなあっと思っています。じゃあ、そのために何をしていくかっていうことですけれども、ひとつには、今、そこにお手元に資料が1枚おいてありますけれども、少人数教育、まずこれですね。人数が多かったらできませんね。もう一つは、自由選択が可ってことではないかな。決められたことをやれていうのでなく、やっぱり参加型といいますか、いわゆるマイペース型でしょうか。校則にせよ、なんにせよ絶対っていうのではなくて、授業に行けないこともあつていいでしょうという風に考える。そういうことかなと思います。もう一つは、信頼関係。どのようにして生徒と結びついていけるか、信頼関係をつくっていけるかが課題だと思います。一通り授業はしますが、勉強は嫌だと、ただ座っている生徒さんもいます。なかには携帯電話で電話を始める人もいましたが、それはやめとけと、ただメールとかは、まあ、周りに迷惑かけないならいいかなという風にして、まずは座ってもらって話を聞くことからのスタートでした。そんななかで、何も聞いていないようなんだけど、一つだけでも先生と生徒が何か、何の形でもいいんですけれど、解りあえる、コミュニケーションがとれるようなこともできてきました。そのときにやっぱり、ちょっとしたことから信頼関係が生まれてくるのではないかと期待しています。

さて話は戻りますが、フリースクール時代のその不登校の子と付き合っていて一番思っていたことは、元気になって欲しいということでした。言葉で説明して、子ども達に「学校行こうね」っていうくら言っても、結構通じないというか、言葉で説明して学校に行けるようになるんだったら、みんな先生方も一生懸命お世話しておられるのだから、いくらでも行ったらはず。行かない、行けるわけがないっていうか。そこにはやっぱり、信頼関係の積み重ねとかそういった、どうしても必要な何かがあるんだと思います。そういうやっぱり、時間の積み重ねっていうものをしていかななくてはいけない。時間はかかるんですけれども、信頼関係をやっぱり築いていかななくてはなりません。お父さんとかお母さんがしからないとか、もちろん私たちもしかってはいないんですけれども、逆にしからないでほめる。地道に努力しようがんばったねとか、座っていただけだろうけれども、ようがんばったねとか。なかには学校終わったとたんに来て、でも、来ただけでもよかった。「よく来たね」という風にほめています。一般的には「なんで来なかった」みたいなそんな風にしか思わないかもしれませんが、敢えてそのように言っています。私達はそれはそういう風にする事で少しずつ生徒たちが変わっていけると信じています。信頼関係に単に任せる、見守るといいましても、難しいものですね。時間がかかるという意味では、今までフリースクールのときには、卒業という

期限はなかったもので、ずっとその子どもさんがなんとか元気になればいいと時間のことは考えてなかったのですが、WILL BE 高等学院になって、卒業までの 2, 3 年間という、そういう時間との戦いというものもこれから考えていかないとだめだろうと思っています。

長い間かわったひきこもりの例ですが（そんな数は多くないですが）、7 年間もひきこもっていて、ずっと一回も家から出なかった人の相談がありました。それから一週間に一回ずつ通いながら、4 年目くらいにして、そうですね、もうそろそろ年になったから、それまで、一言も家から出ようよって言ったことなかったんだけど、「いよいよお父さんもずいぶん疲れた様子だよ。」とか言ったら、「もうそろそろ出たい」とそう言って、遂に家を出た人がいました。今は元気に働いているようですが、関わり始めてから 4 年目にしてようやくでした。だから、非常に時間がかかります。でもやっぱりそういうかわり方をしていけないとだめだと思います。ですから時間はかかるんだけど、限られた時間、なおさら学校の中っていう、もともと限られた時間で、そこで何ができていう非常に物理的に難しいことをやっているのかなと思います。難しくて結論らしいことはいえませんが。

以上、不登校の話をしまして、みなさんのような教育学部の学生さんに力を借りれたらいいと思います。若いんだから、同じような近い年代の人に接してもらって、要するに、ともに成長するっていうそういう視線で、接することが大事なのかなと思います。以上、これで終わります。

<司会（大下）>

ありがとうございました。それでは森先生、お願いします。

<森透>

それでは、お時間いただいてすみません。私の話なんですけど、やはり、後書きみたいなものなんですけど。私の前の 3 人の先生方のお話が非常に面白いので、できればその方にもっとお時間をさしあげたいと思います。私のほうから少しだけなんですけど、このテーマでお話をさせていただきたいと思います。いまお手元に資料があると思いま



すけど、パワーポイントを使ってお話いたします。全部の内容を話しますと、とても 20 分では無理なんですけど、私が言いたいのは、普段の教育全体のなかでやるのが大事ではないかということと、学生のみなさんは、教育実習を終えたばかりで、授業とはなんだろうかということと、授業するってことはすごく大事だと思うんだけど、授業そのものが一方通行ではいけない、退屈な授業ではいけない、授業そのものを変えたいって思います。学校では、圧倒的に授業が多いわけですよ。いろんな活動もあるけど、授業が一番、授業が変わらないと他のこといろいろやっても、

いけないと思いますし、授業でどんなことをやればいいのかという点。そういうなかで子どものかかわりをどうやったらいいのかってことがあります。難しいんですけどね。5番目、ここはね、皆さん方3年生かなりの方がライフパートナーとか、たぶん全員の方、不登校の子とやってますし、探求ネットワークもかつてやっていた人もいるし、今やっている人もいらっしゃいます。そんななかで子どもの可能性なり、子どもとの接し方で感じていることに触れたりしたいと思います。時間がないので、結構すっ飛ばしていきたいと思います。

私の場合、私自身の専門は教育学、教育の歴史とかなので、今の子どものおかれている状況、不登校の問題などとか、いろいろ問題あるんだけど、象徴的な事件がいくつかあります。それによって今の子どもを代表するわけじゃないんだけど、やはり見過ごせない事件が結構、去年から今年に起きました。つい昨日かおとといも、新聞見れば分かるんですけど、中学の男の子が、お母さんを、非常に悲しいんですけど、殺してしまったという事件がありました。去年の長崎の殺人事件、これはたぶんみなさんも覚えていると思いますが、6年生の女の子が同級生の女の子を刺し殺してしまった。これじたい非常に本当に深刻で、お父さん非常に悲しいわけですね。今年の6月に1周年で新聞にお父さんの談話が出てましたけど、毎日新聞の支局長の方だと思うんですけども、1年間ずっと考えていて、なぜ彼女が自分の娘を殺したのか、いろんなコメント、いろんな雑誌、報道関係全部見たんだけどやっぱり分からない、なぜかは分からないと書かれていました。私自身も、この事件についてはいろんなコメントできると思いますし、いわゆる評論家的にもいえるかもしれませんが。たとえばインターネットのチャットですか、ここで嫌な事を言われたとか、もう一方で彼女は同級生ですから普段接してるわけですよね。そういう実際触れてる部分と、そのインターネットの世界といいますか、バーチャルな世界とのズレみたいなものもあるかもしれません。まあ、心の闇とってしまっただけじゃないんですけど、やっぱり今の子どものある意味そういう難しい部分があるのではないかと思います。

それから最近ですね、今年に入ってから、17歳の無職少年や高校生の事件が続きました。寝屋川市の小学校の教師殺傷事件、山口県の県立光高校の爆弾事件。この光高校は進学校ですが、いじめとか、嫌がらせに対する爆発ですね。そして、最近の統計ですと、小学生の教師への暴力がぐっと増えてきている。以上の例をあげると、暗くなってしまうんですが、今の子ども達はそのような面もあります。しかし、もちろんすばらしい子どもさんもたくさんいますし、教育実習やって、みなさんの触れられた小学生、中学生はすばらしい子どもたちだったと思います。

これもちょっと戦後のグラフで面白いグラフなんですけど、これ説明すると結構時間かかってしまうので、便利だなと思って、授業でよく使うんですけど、1970年代というのは、1つの戦後の区切りかなという気がします。戦後初期の50年代60年代に高度経済成長があつてそのあとに、もちろん70年でびったり区切られるわけではないんですけど、70年代あたりを区切りとして、高校進学率がぐっと増えるんですよね。そうすると、中学校の三年間がそれまでは中学校を出て、僕は働くよ、僕は進学するよとそれぞれの道があったと思うんですよ。60年代の初めの頃は…。

しかし、70 年代になるとほとんどが高校進学になる。やっぱり中学校の 3 年間というのは、自分は将来仕事をしようか、それとも勉強しようか、それなのに全員が高校に行くという状況になって、中学の 3 年間というのは高校受験という 1 つのシステムにはいっちゃうというのが 70 年代以降あるのではないか。それだけじゃないんだけど、そういうことをきっかけとしているんな子どもたちのストレスの問題とか校内暴力、それでいじめになったり、それがさらにだんだんと不登校になって、80 年代、90 年代になるのかなという気がします。

21 世紀にもう入りましたけれども、今後の教育の方向を考える上で 1 つの貴重な文書が中央教育審議会（中教審）というところからでました。「21 世紀を展望した我が国の教育のあり方」（1996 年）、これが基本的に 21 世紀の教育を方向づけている文書なのではないかと思います。ここでは過度の受験競争はいけない、いじめ・登校拒否の問題ということを指摘し改革の提案をしています。この文書は学校、家庭、地域社会全体にわたって提案しています。そのなかで基礎基本の教育の徹底と「総合的な学習」が提案されたんですね。でその提案を受けて、次はカリキュラムを考える教育課程審議会というところで議論され、学習指導要領の改訂につながります。ここで正式に「総合的な学習の時間」という枠組みがつくられました。この「総合的な学習の時間」というのは皆さん良く御存知だろうと思いますけれども、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し云々という趣旨の学習活動ですね。教科書はありませんので、子どもたちが試行錯誤しながら主体的に学ぶといった時間として掲げようということです。いろんな可能性をこの時間で実現できてきたと思います。小・中学校は 2002 年度から、高校は 2003 年度から実施されましたが、今年で 4 年目です。この時間は子どもたちの学びにとっていろんな可能性をひらいたと思いますが、一方で評価の仕方が足りないんじゃないかとか、本当に総合では力がついているのかどうか、という批判もでてきていろいろ難しい。

実は去年の 12 月に OECD（経済協力開発機構）というところが 2 回目の PISA という学力の世界調査の結果を公表しました。新聞にも大きく出まして、日本は学力トップから陥落したとか、学力低下だとか指摘されました。世界から見れば、日本はまだまだ上位なんですけれども、やっぱり成績がおちた、学力が下がったとして文部科学大臣は非常にびっくりして、全国競争テストをしなくちゃいけない、基礎学力を徹底してたたきこまなくてはならないという談話を発表しました。

この調査は 15 歳を対象として、日本では高校 1 年生ですが、読解力、科学的リテラシー、数学的リテラシーの主要 3 分野で行われました。世界で 27 万 6 千人ですごく多いですね。日本ですと 4,700 人が対象です。この学力というのは、いわゆるドリル的な学力ではなくて実生活のさまざまな場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価するもので、特定の学校カリキュラムがどれだけ習得されているのかを見るものではないとされています。思考のプロセスの習得、概念の理解、及び様々な状況でそれらを生かす力を重視する、そういった力を求める問題が出されています。それで成績がおちたというのは確かに深刻な問題ですが、やっぱりそういった力というのが 21 世紀型の学力、学ぶ力なのではないかと思います。

たとえばですね、日本の円とドルの換算について、日本と外国ではお金の単位が違うと、それを換算した場合にどれぐらいのお金なのかという問題とかですね。それから地図がありましてね、ある山に行くときにいろんな行き方があると、どのコースを通った方が一番速いかとかですね。それからおもしろいのはスケートボードというのがありますよね、あれは既製品がいくらだと、それで部品がいくつかあってね、自分で組み立てることもできると。それで部品の値段がいろいろかいてあるんですね、どちらがどれぐらい安いかと。そんな難しいことではないですけど、けっこう実際に自分の頭で考えたり、生活の場面を想定して答える問題がけっこうありますね。ですから報告書はこれぐらい分厚いのがでてますので、そのなかに数学の問題ですとか、読解力の問題ですとかいろいろでてますね、非常におもしろいですね。そこで求められている力というもの为一体何なのかということと、いわゆる学校教育でね、基礎といいますか、教科で養われる力というのも両方見ながらね、これから見ていく必要があるかなと思います。

この世界調査でトップなのは北欧のフィンランドなんですね。小さい国ですけども、フィンランドの教育はなんだろうかというのはとても重要なことなんですね。なぜフィンランドなのか。これについても今後で皆さんと一緒に考えていきたいテーマですね。文部科学省は、今年の3月から4月にかけて全国調査をしたんです。全国の小学生、中学生、それから保護者、学校の先生、学校評議員、都道府県市町村の教育長、全部で3万6千人で行いましたが、そのなかで総合学習についてだけとりあげます。総合学習については、好き嫌いを聞いてみて、小学生が「とても好き」と「まあ好き」が60%、中学生は、半分にもいかない46.2%ということですね。それで、評価については、保護者は、小学生の方ではだいたい良いが7割以上、中学校では6割以上ですね。それから学校評議員というのは、各学校の地域でいろいろ協力してくれる、諸団体の関係者や学識経験者なのですが、評価が非常に高いんですね。しかし、先生方は教員全体ではとても良い、まあ良いが5割、それから小学校・担任は半分、中学校では半分いかない。それから教育長では8割が良いという評価でした。では総合学習どうするか、やめたほうがいいのかという意見に対する「賛成」が保護者2割、学校評議員が1割、それに対して教員は、半分近くがやめた方がよいという意見です。学校別にみると、小学校の先生は、38.3%、中学校の先生は57.2%。ですから、中学校の先生は特に総合の時間が足りないとおっしゃっているんですが、どうしたら良いか、本当にそれは意味があるのかどうかすごく悩んでると思うんですよ。一方で、学力が低下したということで、国語とか算数の基礎的な学習の時間に使いたいとかね、そういうことも実際あるのかなと思うんです。そうすると、今の学力とか生きる力を考えたときに、教科の力を伸ばしていくのがよいのか、総合の中で本当に考える力を、教科的なことも含めてね、何かできないのかと、今はそのせめぎあいかなという気がするんですよ。僕は両方とも大事だと思うんですが、この問題は今後皆さんもぜひ考えてみてください。

次に、授業とは何かということで、みなさんは教育実習やられたばかりなので、授業というのを3つの側面で考えてみたいと思います(参考・稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1996年)。

まず、1つは、表現は難しいかもしれませんが、認知的・技術的実践の側面です。いわば教科の知識を与える。それからもう1つは、授業のなかでの対人的・社会的な実践、つまり授業の中で議論をしあうとか、先生と子どもが対話をするとか、そういう人間同士のコミュニケーションというのが重要になりますね、それが2つめ。それから3つ目は、今学んでいることは自分にとってどういう意味があるのかという自己内的、倫理的な実践、自分にとっての意味ですね。探究し、議論しあう共同体が大事だと思います。一方的な思惑で子どもたちを統制する教師から、多様な子どもたちの学びと響き合える教師への脱皮。今のをもうちょっと言い直しますと、教育内容をどう教えるのか、対象との対話ですね、多分みなさん方実習中に授業案をつくっていろいろ教えたい中身を考えて子どもたちに教えましたね。ですからこれはまずわかりますね。と同時に、その中身を教師との関わりとか、仲間同士、つまり子どもたち同士が授業のなかでお互いに関係性をつくりながら高めあう、議論しあうというのは他者との対話。一番目は、対象。2番目は、他者との対話。で、最後は自己との対話。この3つが授業では必要なと思います。ですから、自分たちの授業を、私自身も大学で授業していますが、上手くいかないんですが、やっぱり教えたい中身とそれを提示したときにクラス全体からどのような議論がおきて、最終的に一人一人の子ども、学習者が学んでいるのはどう意味があったのかといったですね、自分との対話というんですかね、アイデンティティ、そこまでいかないといけないのかなと思っているんですけれども。それでやはり今までの関係、教師と子どもとの関係を見直していくことが必要と思います。

今大学で、探求ネットワークとかライフパートナーということをやっていますが、この辺はですね、今日いらしてる松木先生のパワーポイントをお借りしているんですが、僕はつくれません。で、大学のなかで6年間、4年間を通して考えたときにどんな取り組みがあって、そのなかに1つ大きな柱として不登校児支援活動としてのライフパートナーであるとか、もちろんこれだけではなくて、いろんなものがありますけれども、やっております。新課程の方（ゼロ免）の方では、地域実践科目という地域に根ざしたいろいろな取り組みを行っております。そこでみなさんライフパートナーをやっている中で、子どもとの対話、その子の可能性、それから悩みですね、いろんなことを抱えていらっしゃって、多分ここにいるみなさんもそういう子どもさんと関わってこられたのだと思います。探求の方も毎年、今も現在進行しておりますけれども、そういうことですね。やっぱり、子どもの可能性をさぐるというのは、探求ネットワークも8ヶ月本当に大変ですけれども継続してやることに僕は意味があると思います。単発の月一回の活動で、来る子どももどんどん変わっているのではだめだと、そういう活動全国でも多いです。他の大学でも、けっこうそういうのは子どもを集めて単発にやるのは多いですけども、福井大学のように8ヶ月間、継続してやるというのは他の大学ではないだろうと。でも、ちょっと最近は増えてきたかな。そこで継続してやっていくなかで、自分と子どもとの関係性ができるわけです、そういうふうに思います。

子どもたちの可能性を引き出す教育とは、複雑で多様な価値観の現代社会において、子どもたちは自分の良さ・個性を伸ばしたいという基本的な要求をもっているだろうと僕は思います。そして、

学校・家庭・地域社会は、その子どもたちの基本的な要求に応える責任があるのではないかなとも思います。で、教育実習を通して様々な個性に触れ、それを受け止めた学生たちがいるだろうと思います。それから、授業の3つの側面ですね、それを考えて頂ければ良いと思います。それから、探求ネットワークやライフパートナーの活動を通して、子どもたちの内面や思い、わがままなどに直面した学生たち。先ほど、怒っちゃいけない、叱らないということが出ていましたが、探求ネットワークでもいかに叱らないのかということ、叱るとはどういうことか、ということがけっこうテーマになっていたことを思い出したんですけれども。活動が面白くなければ子どもたちが遊びだしちゃう、子どもは正直ですから。そのとき学生は叱ってよいのか。叱るのは簡単だけど学校ですぐに叱っちゃうかもしれないけれども、探求では叱るのはおかしいんじゃないのか、子どもは基本的にやりたくて来ているんだったならば、活動を子どもにとって本当に魅力的にするようなことができないだろうかとけっこう悩んだことがあります。そういう議論は、僕はすごく大事なかなと思います。大学の授業のなかでも、これは学生と教員の双方向のコミュニケーションがすごく大事なと。子どもの可能性というのは、子どもというのはおかしいかもしれないけれども、学生にも置きかえられるわけで、学生のみなさんの可能性を大学教育はどうやって引き出していくかということにもなるのかなと思います。ごめんなさい。時間でですね、ちょっとオーバーしました。

<司会（大下）>

どうもありがとうございました。これで4人の方の提案が終わったわけですが、3時までですから、あと20分しかありません。まずですね、皆さん方のなかで4人の方の御提案をお聞きになって、ご質問とかですね、コメントと言いますか、こういうところをもう少し聞きたいというところがありましたら手を上げてください。いませんか。それではご意見がないようですので、先生方もしですね非常に時間を切りまして、せかしてしまいました。で、ほんの2分ぐらいしか、お1人時間お話しして頂けないかと思っておりますけれども、もし何か言い残したことがありましたらお願いできればと思うのですが。坪内先生いかがでしょうか。

<坪内先生>

先ほど合唱団のことを申し上げましたけれども、実は、優秀な子ばかりではないんです。いじめられっ子、学校に絶対行かない子というのも合唱団にはいます。それから、身体障害。先ほど言語障害の子についてお話ししましたが、「10年間はみんなでいじめないでこよう。みんな大事な



人間なんだからな、ほんとにしゃべれるようになったら拍手してやろうよ」と言いました。今ね、

その子はお坊さんになって、お説教してますよ。いろんな子がいる。学校で椅子を投げたり、机を蹴飛ばしたりそういうような子が、テレビのコマーシャルで歌っているソアーベっ子の中にね、出てますよ。いい顔して歌ってるんです。担任の先生悩んでね、何でだろうと、「なんで学校では暴れるんだろう。あの子がいるからあのクラスで授業するの嫌なの」だってね。本当は良い子なんです。

高校生でちょっとチンピラみたいな子がいましてね、ソアーベの練習を参観に来たお客さんが、「あの子ちょっとこわい」と。ところが「大きな口を開けて楽しそうに歌っているわ」とびっくり。ズボン、ダラーンと下げて、シャツをバーンと出してね。今もう社会人になりました。僕は高校までは不良させてほしかった。社会人になったら、きちんとするよ。そういったわけで、子どもにもいろんな事情があります。非常に上品な高校生がいました。女子高校生ね。本当に良い感じでね、静かに喋って、にこにこね。で、あまりにも気になったものだから、「〇〇ちゃん、君は上品だね、珍しいよ、今どき。学校でもそうなの？」と、聞いたんです。「先生何言うんですか。学校でこんなことしてたら無視されますよ。」なるほど。ちゃんと使い分けています。学校の先生を見る目がね、もう小学校4年の後半から、あの先生は話せる話せないと区別する。子どもがみんな笑っているときにニヤリともしない先生、こういうことを一番嫌がる。こう言うときに一緒に笑ってほしいのに。

それから、えこひいきをとっても嫌がるんです。僕は子どもに向かって、「絶対えこひいきしないから」と言います。私は「叱らない指導」を何十年も続けてきましたよ。叱らないと子どもたちは必ずお返しをしてくれます。本番のステージでね。たとえば、ウンチャ、とこう手をね、上げてね、足をまげて歌を歌うことになってる。ところが子どもは、今まで練習ではウンチャだったのに、本番ではウンチャチャ、ウンチャチャと勝手に派手にやるんです。それが演奏の最中に列の端からずっと伝わってね。びっくりしますよ。毎年、指揮者と伴奏者を驚かそうってね、もくろんでるんです。うれしいですね。「本番で失敗しても良いよ。勘違いしちゃいけないのは、僕の真似をすること。僕は僕だ。みんな素人で、音楽家になるわけじゃないんだ。本番のお客さんの目の前で寝転んで歌ってもいいんだぞ」など、僕は思い切ったことを言います。「失敗してもかまわないよ」と。あまり目立たない女の子が「独唱させてほしい」と申し出た。「1回この合唱団にいる間に千何百人のお客さんがいるなかで独唱したい」と。この子はひょっとしたら歌っている最中にのどがつまって歌がとまるかもしれない。なんかそんな気がしてならんのですが、どうしよう。1回やらせました。つかかりました本番で。しかしそこで、僕は絶対叱りません。「良い経験しただろう」と。失敗しても責任は僕なんです。子どもじゃないんです。そういうことでね、静かに表現する、やかましく表現する、いろいろあるけれどもとにかくこの合唱団に入った以上思いきりお喋りしたり、思いきり騒いだりさせます。

ところが、あるサインを送ったら3秒で静かになります、100人の子どもがね。そういう方法を考案しました。でそういう風にね、大事なところだけしっかりルールを覚えさせておかなきゃいけ

ない。たとえばね、ちょっとみなさん背伸びしてみてください。楽でしょ、やっぱり。だから練習では、しょっちゅう背伸びさせている。気分的に安心だし、失敗してもかまわないから口を開けなくても良い。だってテレビでカワイ子ちゃん歌ってる。『あいしてるのよ〜』なんて口を開けて言わない。半分口を閉じて『あいしてるのよ〜』と、目だけ笑ってる。それでも歌えます。いいじゃないの。そうしているうちに子どもはパッと口を開ける。「ほう、開けたほうがもっと可愛いな」と、そういうときに褒めますね。“叱らないことと褒めること”しかしていない。それでね、どんどん子どもを動かしていただけますから。どうか試してごらんください。もし、ご質問ありましたら、またその時に。

<司会（大下）>

それでは平井先生お願いします。

<平井先生>

すいません、先ほど不登校についてかなり大雑把にしゃべったものですから（話をつけたします）。あと、先ほどは心の話だけだったものですから。月曜の朝礼で、実験をするとか、あるいはね。（子どもをほめる話をします）

子どもたちの中で1人、学校の帰りにゴミ置き場があつてですね、そのゴミ置き場のゴミがカラスか何かにやられていた。おばさんがそれを掃いたりしていると、その子どもが手伝いをした。（おばさんが）「あなたすごいね、名前は？」と聞くと、「いや、名前はいいんだ。僕ボーイスカウトでいつもやっているから。」といって帰った。そのおばさんから学校に電話がかかってきて、実は、涙声でかかってきた。それで、その話を聞いた私も感動してしまって、それを全校朝礼でしゃべるんです。「うちの学校にはこんな素晴らしい子がいる。」「こんな子と一緒に私がいれる。こんな幸せなことはない。」と褒めたんです。問題ある学校ほど褒めるんです。そして、そのことをそっくりそのまま瓦版（校長室だより）に書いたんです。そして、それを保護者に渡します。そしたら、親が「その話しどんな話やったの？ もっと詳しく聞かせて。」って子どもに聞いて、校長の話が家でも伝わる。

実は、情報公開って言うでしょ。学校の情報公開ってどんなのって言うと、PTA 会計とかいろいろっていうけど、（学校本来の情報公開というのは）そうじゃなくて、学校がどんな内容の教育をしているか？どんな考えで子どもに教育をしているのか？っていう事を伝えること。これがまさに情報公開だと思うんですよ。

子どもたちが、「来週何しゃべるの」って聞くんです。校門のところで、「おはよう」って言うたら、「（来週何しゃべるのか）教えて」って言うてくるんです。そんな感じで子どもとの会話が始まります。だから、月曜朝礼を非常に魅力的にすることは、実は、月曜朝礼が不登校を無くす要なんです。月曜朝礼でみんなが、ワー楽しいってニコニコしていられると、そのまま授業に入れるん

です。月曜日は学校に来たくないでしょ。それを防ぐために月曜朝礼は最もよい。でも、それを失敗したら、不登校を作るきっかけも、校長が担っている。月曜朝礼は要。

そして、校長室を遊び場にする。しょっちゅう遊びに来る子は、何か寂しい心を抱えている。学級でうまくいかない。あるいは、宿題を忘れた。けど、ちょっと話して、ニコッとして帰る子はもういいの。そろそろ5分前やぞ！って言って、そしてみんな帰っていくのに、その子だけ後始末やら何やらをきちんとしてくれる子がいるわけ。その子はちょっと心に傷がある。「あっ、ありがとな。頑張っておいで。また次の時間もおいで」って言うと、ニコッとして帰っていく。だからね、そこに(残って)いる子(について)は担任の先生に「ちょっとあの子寂しい思いをしているのか？」って聞く。そうすると、「あっ、あの子は今家で離婚話が進んでいて。」など、いろんなそういうことがあるんですね。そういうことが聞き取れる。もちろん担任が子どもを捉えるけれど、遊びに来る子を見ながら、私がそういう子を捉える。遊ばせといて捉えるのだから、相談しにおいでと言ったってなかなか来ませんよ。遊びにだったら勝手に来るから捉えられるんですよ。

だから、先ほど言った(保護者や地域むけの)瓦版って言うのは、褒めまくりを書くでしょ。そして、地域にもその褒めまくりの瓦版をパーっと渡して、うちの学校はイイ学校や！イイ学校や！って褒めまくるの。そうするとなんとなくね、イイ学校なんやって、みなさん思い始めるの。不思議なもんですよ。1年くらいやって、2年目でみなさんこの魔術にかかるね。それから、「イイ学校になったね。」って褒めてくれると、地域の人が子どもが朝学校に行くときに「おはよー。」って言うようになるんです。地域の人が優しく見守れるようになる。だから、ほんとにいいところをどんどん褒める。

あの、(佐世保市で友達の)首切った子どもがいますよね。非常に悲しいよ。だけど、小学校6年生がみんな首切るのかって思うでしょ。(6年生は)危ないって。でも違うでしょ。もっともつといい子が山ほどいるでしょ。そのいい子の心のなかに、この世の中にはこんな素晴らしいことがあるっていう明かりを僕らがいっぱいつけなきゃ。確かに切った子は1人よ。だけど、その子だけ焦点当ててるでしょ。それじゃ(他の)子どもはつぶれますよ。反対なことになりますよ。教育は夢を語るからです。夢を作ることですから。保護者にも子どもにも夢を作って、夢に向かってそういう悲惨な事件が減っていつてくれることを願うんですよ。よい所を褒め続ければ、悪い所はなえていく。そういう言葉があります。私はそれ大好き。まさにその通りだと思います。褒めて育てて悪い所はなえさせていく。それが基本だと思いますよ。

あとですね、「星空観察、夜来いよー！！」これ大好きね。それと夏休み。水泳に子どもらが学校に来る。(泳げない子を担任が)呼びつけるんです。そしたら、嫌そうな顔をして出てくるんです。私が、「泳いだら後で、梅ジュース飲ますぞ。」って言うんです。(最初は)梅シロップって言うたんですけれど、「梅酒飲んだ」って家帰って言うたもんですから、「違う違う違う！！梅ジュースやって」。酒飲ませたら大変ですから。それから、梅ジュースって言うと喜んで来ます。だから、そういう(泳げないというつらい状況にある)自分をもう一度、こう一歩上げたい！ だけ

どなんか辛い。悲しい。そういうときに、自分たちの心をちょっと許そうかなと思えるには、なんか励ましがいらいますよね。

それから、あと、「校長先生と話そう会」って言って、保護者とちょっと自由に話す会も作りましたが、1ヶ月に1ぺんずつ。それと、私が教員に話すとき、あるいは保護者と話すときは、出来るだけ自分が感動したことを話します。感動したことを（反



対に) 例えば、「二宮尊徳は偉い人なんだ。本をいっぱい読んで勉強した。あんたらもこんなふうになりなさい。」これ、くさいでしょ。くさいんです。これ（他人を出して他人を規制することを）やると、あの先生はなに言うのって、こんなになります。自分が感動しなかったことを言ったらこうなります。自分が感動したことを素直に子どもに語る。それが基本だと思います。すいません。そんなことが実は裏にあって、さっきの不登校とかかわっておりますので、ちょっと付け加えてごめんなさいね。

<司会（大下）>

竹内先生、もしありましたらどうぞ。森先生はいいですね。（笑）

<竹内先生>

特にはないんですけど、もしみなさん、難しい子達の中で、授業に挑戦してみたいというのがありましたら、ぜひ訪ねてきてください。1回やっていただくことが出来るのもいいんじゃないかと思って、実際見ていただくより、やっていただくほうがいいと思いますので。企画がいろいろありますが、ぜひ参加してください。誰のためにやっているかっていうと、親御さんにとってよいものではなく、やっぱり1番は子どもたちのためだと思ってやっています。ありがとうございました。

<森先生>

今日は、3人の方々にお礼を言いたいんですけど、坪内先生は今日始めてお会いしまして、ソアーベという名前はよく知っているんですけども、私も歌は好きなもので。本当にありがとうございました。平井先生は実は、以前松本小学校の校長先生でして、私の息子が松本小学校におりまして、本当にお世話になりました。校長室に行くと本当にいろいろなものがあるんですよね。本当に、あの、物がいっぱいおいてある。先ほど話にもありました、夜空の星の観察会なんかにも、妻と一緒に行って本当にお世話になりまして、ありがとうございました。竹内先生は、実は英語の免許で、当時私の教育の何かの授業を取られてて、ずいぶん年配の方だなあ、誰かなあと思ってい

たら、竹内冒険塾という塾が私の大学の通勤途中にありまして、その竹内先生と一致しましてですね、うれしかったです。その塾では子ども達と一緒に北海道ヘスキーへ行ったり、オーストラリアでしたっけね、そこでいろいろな子供たちがいて、連れて一緒にやっているっていうのをよく知っていましたね。その竹内先生が、WILL BE というフリースクールをつくられたって聞いていたので、本当にそういうのを頑張ってやっていらっしゃるんだなあと思います。本当に、今日、お忙しいところ、ありがとうございました。

<司会（大下）>

どうもありがとうございました。最後にですね、主催したものとして申し上げたいのですが、感想を一言。「子どもたちの可能性を引き出す」というタイトルですが、センターの教職員が、これがいいだろうと考えたんですね。主犯は私ですけれども。今日、4人の方のお話を伺ってですね、恥ずかしい思いをしております。そう言いますのは、「可能性を引き出す」っていうのは、やはり教師が何かしてやればっていうような意識が見え隠れしていますね。今思いますと、今日の先生方のお話を聞くと、やはり、しからないとか、褒めるということが出てきました。今思いますのは、子どもというのは、誰もが可能性を持っているということで、その可能性を伸ばす伸ばさないというのはわれわれ教師ではないのかもしれない。子ども自身が決めることなのかもしれないですね。で、その子ども自身が決めるその手助けを少しでもしてやれるのが教師なのかもしれないということを、反省とともに思いました。ただ、そういう教師はですね、ちょっと普通の教師ではそれはできないですね。やはり、情熱と高い見識がないとダメなんだということがわかりました。だから、まじめなだけの先生ではダメですね。やはり、あの、厳しくないダメですね。ですから、みなさんにちょっと説教くさくなるかもしれませんが、しっかり勉強してくださいね。（笑）なんか逆のことを言っているかもしれませんが、やはり、それなりに高い見識がないと、こういう発想にならないですよ。情熱と見識。今日はそれを学びました。ありがとうございました。

<坪口先生>

ちょっといいですか。

<司会（大下）>

どうぞ。

<坪口先生>

ある日、私は福井市役所へ行きました。当時は、タバコの吸える部屋がありました。今は、小さな部屋になりましたが、そこへ行きましたら5、6人のおっちゃんたちがいました。その中に、1人ちょうど私の向かいに、長椅子にうつむいてばかりいる男がいました。40代くらいの男で、私

の左の人が吸殻にタバコを捨てると、それをすっとすぐ拾った。何をするのかなって思っていた。人間は、タバコに関してはけちなんですね。もう2センチくらいしか残ってないのに、男はそれをパツと拾って火をつけて吸った。そのしぐさが不気味なんです。みんな逃げてしまって、結局僕とその男と2人になった。私はソオーッと少し顔を下げて、彼の横顔を見たりした。そんな短いタバコを吸ったら辛いだろうな。実は、僕はパイプのタバコしか吸ってないんです。だから彼にあげるタバコを持っていない。実はね、僕は中学2年からタバコを吸っています。当時は、ピアノを弾くヤツは男ではない、女だと言われた。男なら喧嘩をしてみろと。僕は喧嘩は強いですよ。慣れました。そして、タバコも吸って男と認めさせました。さて、その男ですが、「そんな短いタバコ、辛いだろ」と声をかけたら、「俺はムショから出てきたばかりだ。刑務所から出てきて10日目で金はねェ。」「おおー！ 刑務所の話、聞きたいなあー。」しばらくして私はこう言いました。「アンタねー、悪いことする顔じゃねえぞ、その顔は。」顔を見たら、彼はグッと僕を睨みました。「もう1回言うぞ。その顔は悪いことのできる顔じゃない。」「本当か！ それ本当か！」「本当だ。僕は人を励ます仕事をしている。ウソで褒めることはない。褒めるなら本気になって褒める。」「その言葉を早く聞くんだった。そうすればムショに入ることはしなかった。その言葉を早く聞きたかった。」彼は本当に悔しがりました。家庭が貧しくて、褒められた記憶がないと言う。褒められているでしょうね、人生の中で少くくは。けれど、心に残るような褒められ方をしていない。大人でもそうです。僕は今でもけなされるより褒められた方がうれしい。感情は子どもと全く一緒です。以上です。ありがとうございました。

<司会（大下）>

どうもありがとうございました。

<平井先生>

1つだけいいですか。

<司会（大下）>

3時15分から次の予定がありますので、簡単に。

<平井先生>

1つだけ。すいません、何度も出てきて。私、1つだけ言いますが、教育っていう言葉はふつう「教え育てる」っていうふうに解釈してました。私、新採用の頃ですけれども、夜遅くまでかかって、資料をたくさん作ってました。その頃、科学読本（を買わせる費用）がなくて、それを自分でガリ版をきって資料を作りました。大変喜びました。喜んだものだから、また作りました。4、5回目の時です、子どもが「ああーまたか」って言いました。私、カーッと怒りまして、「何言って

んだ！俺昨日夜の3時までかかってやったのに、もう二度とやらんぞ！」って言ったんです。けれど、ぐさっと私の心に刺さったもんですから、それは私が一所懸命努力しても子どもが受けてくれないという状況。それが何でか解らずに来たんですけれども、まあ、10年近くたって、あるとき、ふっと解りました。「教える、育てる」ではなくて、「教える、育つ」。子どもが「育つ！」間は、じゃあ、教師は祈って待つのみです。それが教育なんだと思うようになりました。それから、（教壇に立つのも）ずいぶん楽になりました。以上です。

<司会（大下）>

はい、どうもありがとうございました。あの、何故かですね、終わりになればなるほど、たびたび素晴らしい言葉が出てきまして、残念ながら時間がありません。それでは、最後にですね、4人の方に大きな拍手をお願いします。どうもありがとうございました。